

[研究ノート]

トマス・ナストの黒人表象

公立千歳科学技術大学 理工学部 小川正浩

“Let’ s stop them damned pictures. . . I don’ t care so much what papers write about me-my constituents can’ t read; but damn it, they can see pictures!” William “Boss” Tweed ⁽¹⁾

1

トマス・ナスト⁽²⁾ (Thomas Nast, 1840-1902) は、共和党寄りの週刊新聞『ハーパーズ・ウィークリー』 (Harper’s Weekly, 1857-1916) を主たる舞台に南軍の残虐行為や黒人奴隷の悲惨な状況、ツイード・リング批判⁽³⁾といった政治諷刺画を発表する一方で、タマニイ・タイガー、民主党・共和党を象徴するロバとゾウ、アンクル・サム、ミス・コロンビア、太ったサンタクロースといった有名な寓意的シンボルも創造し、アメリカの大衆に広く受け入れられた政治諷刺画家である。

ナストが生涯に亘って描いた政治諷刺画は2000枚以上にも及び、そのテーマも多岐にわたっているが、ドイツ移民のナストが比較的力を入れたテーマのひとつにマイノリティの擁護がある。南北戦争後の再建期において政治の中枢を担った共和党急進派の人種平等の政治理念に共鳴したナストは、彼らの理念を反映するような一群の諷刺画を発表する。とりわけ黒人を題材にした諷刺画は他の人種・民族と比べて格段に多いように思われる⁽⁴⁾。そこで本稿では、ナストの描いた政治諷刺画における黒人イメージがどのようなものであったかを主に再建期に発表された作品をいくつか取り上げて見ていきたい。結論から言えば、ナストは再建期の共和党急進派の政策基本方針、とりわけ憲法修正13条、14条、15条、公民権法などを支持するような諷刺画を描いて黒人擁護に務めるが、再建の理念が未完に終わることが確実となるその後期には、黒人を批判するような諷刺画を発表するようになる。そして再建時代が終結した以降は、社会の動静に呼応するかのように黒人擁護の諷刺画はほとんど描かなくなる。しかしそれでもナストは、大衆メディアにおいて、他の画家たちが黒人を滑稽な愚か者として描いていることに比べれば⁽⁵⁾、遙かに人間的に黒人を描いていたと言えよう。

2

黒人を主題にしたナストの最初の作品は、おそらく、『ハーパーズ・ウィークリー』1863年1月24日号に掲載された《奴隷解放宣言》 (Emancipation of the Negroes, January, 1863—The Past and the Future) だと思われる。この作品は、リンカーン大統領が南北戦争さなかの1863年1月1日に奴隷解放宣言を發布したことに想を得たものである。画の中央を占めている

のは大きな円形空間で、その円上にはアメリカの寓意図像であるミス・コロンビアが立っていて、彼女の背後には EMANCIPATION という文字が飾られている。円中にはリンカーンの肖像画（あるいは写真？）が飾られた部屋で薪ストーブの前に集まっている幸せそうな黒人家族が描かれている。そして大きな円下には小円が重なるように描きこまれていて、そこに黒人男性が跪いて自分の子供を奪い去ろうとしている男に懇願している様子が描かれている。画面構成はこの大きな円形を縁取る形で左右に分かれていて、画面左側は南部における奴隷制の惨状（過去）を、右側は奴隷解放後の黒人たちの新たな生活（未来）を描いている。このように初期の構図は、1 枚の画の中に多くの場面を描き込むために絵画的というよりは物語的な傾向が強い。それはあたかも文字を読めない信徒たちに聖書の内容を絵で理解させるために創世記や出エジプト記などの場面を 1 枚の絵の中に連続的に描きこんでいく初期のキリスト教絵画に似ていなくもない。いずれにしても、ナストは南北戦争を最悪の悲劇と考えていたが、奴隷解放、連邦維持、人種平等の権利といった大義によって正当化されると考えていた。

連邦軍の勝利によってリンカーンは南部の再建政策に取り掛かろうとした矢先、ジョン・ブースの凶弾に倒れた。リンカーンの後を継いでジョンソン副大統領 (Andrew Johnson, 1808-1875) が大統領に就任すると、ジョンソンの再建政策はナストの期待を裏切ったものとなった。もともとジョンソンは南部のテネシー州出身の民主党上院議員で、奴隷制を支持しながらも連邦離脱に反対して、ワシントンに残った人物である。リンカーンは 1864 年の大統領選挙で民主党の戦争支持派を連邦側につかせるためにジョンソンを副大統領にしたという経緯があった⁶⁾。

ジョンソンの再建政策に対するナストの揶揄は、1865 年 8 月 5 日号の『ハーパーズ・ウィークリー』に掲載された《恩赦と参政権》(Pardon & Franchise) を見れば瞭然としている。この諷刺画は 2 枚 1 組の対になっていて、左側の画はギリシャ建築の荘厳さを想起させるような講堂でミス・コロンビアが床から数段高い所に置かれた椅子に頬杖をつきながら座して下方をじっと見つめている。彼女の正面下にはアメリカ連合軍 (Confederate States of America) [南軍]の頭文字 (CSA) が記された国旗を握りしめ、足元にはサーベルを置いた拝跪姿の白髪の男がいる。彼の左右には恩赦と書かれた書類を手にした男たちがミス・コロンビアに嘆願している。そして左側の男の背後には大勢の南部の要人たちが自分の番を待っている。画の枠下には PARDON という文字が記され、その下にはミス・コロンビアの次の言葉が引用されている。「わたしはこの者たちを信用してもいいのですか？」(Shall I Trust These Men.)。一方、右側の画は対になっているそれと同じ講堂でミス・コロンビアが連邦軍に従事した黒人兵（左脚が膝下から欠損して松葉杖を両脇に挟んで立っている）の左肩に右手を乗せて画面左側の方（枠外）に視線を向けて、その黒人傷病兵を顕彰しているようなしぐさを取っている。こちらの画の枠下には FRANCHISE と記され、対になっている画にあるミス・コロンビアの言葉の続き、「この人を信用してはいけないのですか？」(And Not This Man?) と書かれている。この 2 枚 1 組の政治諷刺画の背景には、おそらく、ジョンソンの次のような二つの再建政策に対するナストの反発があると思われる。ひとつは、連邦に忠誠

を誓い、解放奴隷を受け入れることを条件に奴隷を除く全ての財産権の復活を含む恩赦を分離州の南部白人に与えること。もうひとつは、南部連合の諸州に対して内戦前の憲法を「新しい民主的形態の州政府」に適するように修正すれば連邦復帰を認めるということ。ただし、選挙資格については分離前の基準に戻すため、解放奴隷を含む黒人たちは選挙に参加できない、すなわち南部はあくまでも白人のものであって、黒人はこれまで通り従属的立場にいるべきだということである。

こうしてナストはジョンソン大統領と彼の政権による南部宥和的な再建政策に批判的な諷刺画を『ハーパーズ・ウィークリー』に次々と発表していった。1866年9月1日号に掲載された《アンドリュー・ジョンソンの再建》(Andrew Johnson's Reconstruction) は、シェイクスピアの『オセロー』が土台になっている。画面構成は、横長と縦長というサイズの違いはあるが、《奴隷解放宣言》と類似の構成を取っている。画面中央に大きく縁取られた円形の空間があり、その中に右腕を負傷したオセロー役の黒人兵が右側にいる人物の話を不愉快そうな表情で聞いている。その人物とは裏切り者イアーゴ役のジョンソン大統領で、彼は道化のような衣装を着てオセロー役の黒人兵に策謀を弄した顔つきで何やら話しかけている。円上には「アンドリュー・ジョンソンの再建」と記され、その下、つまり彼らの背後にある壁には「裏切りは犯罪であり、裏切り者は罰せられなければならない」とか「汝の敵を愛せ」というような張り紙が何枚も貼られている。画面の上部は三つに区切られ、中央が奴隷オークションの冷酷無慈悲な様子(過去)を、左右にはメンフィスとニューオーリンズで起きた暴動での黒人虐殺(現在)の様子が描かれている。画面中央の左右には「反乱軍側への恩赦」、「連邦軍側への拒否権」と書かれた紙が大量に散乱している。画面下部には、蛇使いのジョンソンが、床で二匹の蛇に下肢と腹部から首へと巻きつかれた黒人を見下ろしながら笛の音色で蛇を操っている。この作品には《奴隷解放宣言》に見られなかった諷刺的図像が登場するが、まだ1枚の画の中に様々な社会的・政治的事件とそれらと連関する説明的記述が混在しているため、やはりどこか散漫な印象を受けてしまうことは否めない。

1867年3月30日号に掲載された《ジョンソン円形闘技場—1866年3月30日ニューオーリンズでの無辜の大虐殺》(Amphitheatrum Johnsonianum—Massacre of Innocents at the New Orleans, July 30) は、《アンドリュー・ジョンソンの再建》と比べると冗長的な描写も記述もなく、ひとつの主題に絞って対象を諷刺する体裁が整えられた画であると言える。ここでは、ジョンソンは残忍なローマ皇帝ネロとして描かれていて、自軍の兵士たちが中央のアリーナで無力な黒人たちを虐殺しているのを取り巻き連中と共に二階の観覧席から文字通り高みの見物をしている。その観覧席を支える二本の柱頭には、「メンフィス」、「ニューオーリンズ」とそれぞれ刻印されている。

ナストは、以後、1枚の画の中に様々な出来事を描き込んで多層的な画面構成を取ることをやめて、ひとつの主題に絞って観者が注意を集中して見られるような構図を取るようになり心掛けた。背景を単純化し、見出しを最低限に抑え、より効果的な風刺画を描くようになった。そのひとつが1868年9月5日号に掲載された《ここは白人の政府だ》(This is a White Man's Government) である。この作品には、内戦後の民主党を支える3人の人物が描かれて

いる。画面中央には、南部の退役軍人ネイサン・フォレスト (Nathan B. Forrest, 1821-1877) が描かれていて、彼はフォート・ピロウで黒人軍を虐殺した南部連合軍の将軍である。フォレストはまたクー・クラックス・クランの創設者のひとりと云われており、指導者の称号である「大魔王」(Grand Wizard) を与えられた⁽⁷⁾。高く上げられた彼の左手にはナイフが握られており、そのナイフの表面には南部のイデオロギー的主張である「失われた大義」(The Lost Cause) と彫られてある。画面右側の人物は、元ニューヨーク州知事で 1868 年の大統領選挙で民主党から大統領候補に指名されたホレイショ・シーモア (Horatio Seymour, 1810-1886) である。彼の高く上げられた左手には紙幣の束が握られており、その紙幣を束ねている財布状の表面に「有権者の買収資金」(Capital for Votes) と刻印されている。画面左側の猿顔の人物はアイルランド系移民で⁽⁸⁾、彼の高く上げられた左手には棍棒が握られていて、その表面には「1票」(A Vote) と彫られてある。アイルランド系移民は 1863 年 7 月のニューヨーク徴兵暴動 (the Draft Riots) の中心的存在で、彼らは黒人孤児院を急襲し、黒人に対して凄惨な暴力を行使し、さらには、反奴隷制活動家ホレス・グリーリー (Horace Greeley, 1811-1872) のニューヨーク・トリビューン社を襲撃したことで、ナストを憤慨させた。彼はアイルランド系移民を粗野で、無知で、ウィスキー瓶を持った酔っぱらいの墮落者として描いた。この三人の人物たちはお互いの結束を誓い合うかのように自らの右手を重ね合わせている。と同時に連邦軍の国旗を握りしめながら地面に這いつくばっている黒人兵士を踏みつけて、投票場に向かう彼の行く手を阻んでいる。

ナストはまた黒人の投票に関する民主党の矛盾した行動にも憤りを隠さなかった。民主党は、憲法修正 13 条、修正 14 条の発効にもかかわらず、黒人から投票権を奪おうとしていた。その一方で、手のひらを返したように民主党の候補に投票するようにと黒人に懇願した。ナストは、こうした民主党の欺瞞に満ちた言動を 1868 年 9 月 26 日号に発表した《天と地の差》(All the Difference in the World) で指摘した。この諷刺画は上下 2 枚 1 組で構成されている。上の絵は、共和党に投票した黒人が民主党員とその支持者からいかに嘲弄を受けていたかを描いている。画の上部枠外に「鼻が曲がるほどの黒んぼ (共和党) の臭い」(The odor of the nigger[republican] is offensive) と記されている。その言葉をなぞるかのように画中では、画面左側に「民主党クラブ」と壁板に掲示された小屋の前に作られた豚の柵内で家主のアイルランド系移民 (猿顔) と彼の左脇に立っているタキシード姿の紳士 (民主党員) が共に鼻をつまみながら柵の外側にいる黒人に近寄るなど言っているかのようなのである。黒人は彼らに背を向けて画面右側に小さく見える投票所に向かう黒人たちに手を振っている。下の画は、逆に、黒人に投票を懇願している場面が描かれている。画の下部枠外に「しかし・・・」(But—) と記されているように上の画とは全く正反対の情景である。どうやら黒人と白人女性の結婚を祝するパーティのようで、二人は画面右から中央に向かって歩を進めている。彼女の横には白人の付添人女性が、新郎新婦の背後には介添え人が両手を掲げて二人を祝福するように立っている。彼はヴァージニア州の知事であったヘンリー・ワイズ (Henry A. Wise, 1806-1876) で、奴隷制廃止運動家のジョン・ブラウン (John Brown, 1800-1859) の死刑執行令状への署名を行った人物である。画面左前方には、正装姿の黒人が椅子に腰かけて白

人の中年男性に靴を磨いてもらっている。この男性は南部連合の将軍だったウェイド・ハンプトン (Wade Hampton, 1818-1902) である (黒人男性が足を置いている靴台にさりげなく彼の名前が彫られている)。画の後景にある壁には数枚の張り紙が貼られていて、そのひとつには「我々【民主党】が真の友人であることを黒人たちに納得してもらおう」と書かれている。

3

1866年の公民権法は、解放奴隷の黒人たちに、白人と平等の市民的諸権利を保障した。また1870年3月の憲法修正15条の発効によって、ようやく黒人たちに憲法上投票権が保証されるようになった。もっとも、その後の南部諸州は黒人の投票権を奪うために読み書きテスト、人頭税、祖父条項(1866年以前に本人または先祖が投票したことがある者に限って投票を認める)などの州法を制定することになるが。

しかし、黒人の投票権以上に南部の白人たちに嫌悪感を抱かせたのは、おそらく黒人の政界進出だったのではないだろうか。たとえば、サウスカロライナ州議会では黒人議員が過半数を占め、またルイジアナ州やミシシッピ州では黒人の副知事が誕生した。1870年代を通じて連邦下院議員に当選した黒人も20人に及ぶ。もちろん、ナストもこうした動静に敏感に反応した。1870年4月9日号の『ハーパーズ・ウィークリー』に発表した《時は奇跡を行う》(Time Works Wonders) は、その1か月ほど前にミシシッピ州のハイラム・R・レヴェルズ (Hiram R. Revels, 1827-1901) がアメリカで最初の黒人連邦上院議員に当選したことを題材にしている。この作品も《アンドリュー・ジョンソンの再建》同様『オセロー』を下敷きにしている。画面の中央前景には議員席と通路を仕切る壁の側面が見え、そのそばにマントのようなものを纏った初老の男が自分の身を悟られないように画面右側の議員席に腰かけているオセロー役の黒人議員 (彼のデスクの側面に上院議員レヴェルズと彫られている) の方を見て、震えおののいている。この男こそイアーゴ役のジェファーンソン・ディヴィス (Jefferson Davis, 1808-1889) で、彼は南北戦争時のアメリカ連合国の大統領で、ミシシッピ州選出の上院議員でもあった。自分が座るべき椅子に黒人が座っている。ディヴィスの心中は、ナストがこの諷刺画の枠下に添えたイアーゴの次のセリフから伺われる。「というのも、あの助平なムーアめが、おれの馬にまたがったことがあるらしい、それを思うと毒を飲まされたようにはらわたがキリキリ痛む」(For that I do suspect the lusty Moor / Hath leap'd into my seat: the thought whereof / Doth, like a poisonous mineral, gnaw my inwards.)⁽⁹⁾。

しかし当時の新聞・雑誌の大半は、黒人の政界進出に伴う議会の混乱ぶり、その元凶となる黒人議員の無知・無能を書きたてた。今まで黒人擁護の諷刺画を描き続けたナストもこうした見方を徐々に容認するようになった。1874年3月14日号の『ハーパーズ・ウィークリー』に掲載された《ある再建(?)州での黒人議員のルール》(Colored rule in a reconstructed (?) state.) で初めてナストは黒人を否定的な観点から描いた。画の舞台はどこかの州議会場で、画面中央前景にいる共和党の黒人議員二人が席から立ちあがって激しく口論している

(画の枠下に「黒人議員たちはお互いを泥棒、嘘つき、悪党、臆病者と言いつつ合っている」と記されている)。画面左の黒人議員の背後には別の黒人議員が拳を振り上げて二人をはやし立てている。白人議員は二人の口争いをあきれた表情で見ている。その一方でミス・コロンビアは画面右後景の壇上から鬼の形相で次のように彼らをたしなめている(ミス・コロンビアの言葉も枠下に記されている)。「あなたがたは最も低俗な白人の真似をしているのですよ。もしあなたがたがこうやって自らの人種を辱めるようなことをすれば、後ろの席に行きなさい」(You are aping the lowest whites. If you disgrace your race in this way you had better take back seats.)。このようにナストは黒人議員たちの無作法ぶりをこれまで彼が見せなかったステレオタイプ化した黒人像として諷刺化した。

さらにナストは『ハーパーズ・ウィークリー』1876年12月9日号に決定的な風刺画を発表する。《無知なる投票—名誉は簡単である》(The Ignorant Vote—Honors Are Easy)がそれである。この作品は、南部の解放奴隷の一票の価値と北部のアイルランド人のそれが同じくらい無知なる1票であることを天秤にのって釣り合う黒人(分厚い唇とにやけ顔)とアイルランド人(猿顔)で表象している。カトリック系アイルランド人の投票を頼りにニューヨーク市政を支配しながらも大規模汚職で起訴された民主党のタマニー・ホール同様、黒人の票によって支持された南部の共和党州政府も再建期後期には政治腐敗が顕在化し、76年の大統領選挙をめぐる不正がはびこるようになっていた。こうした状況の中で、選挙に勝つことは名誉なこととは言えず、民主党も共和党も美德を説く資格はないということである。

4

1877年4月、南部民主党との政治的取引に基づいて、大統領に就任した共和党のラザフォード・B・ヘイズ(Rutherford B. Hayes, 1822-1893)は南部から連邦軍を撤退させ、ここに北部共和党による南部再建は終了した。以後、南部は暴力と法によって黒人から選挙権を奪っていく。北部も南部も経済回復を目指して産業拡大にそのエネルギーを注ぐようになり、物質主義が幅を利かせていく。ナストが黒人権利擁護のために描いた政治諷刺画は、再建期の人種平等という理念が挫折したのと軌を一にするようにほとんど見られなくなる。共和党の変質はナストの諷刺画にも変化をもたらしたのである。

註

- (1) John Chalmers Vinson, *Thomas Nast: Political Cartoonist* (University of Georgia Press, 1967: 2014), p. 19. ツイードのこの憤然とした口説は政治諷刺画を扱った文献によく引用されるが、いくつかのヴァージョンがあるようである。もっとも、ツイードがこのように発言したかどうかは研究者の間で議論が分かれている(Edward J. Lordan, *Politics, Ink: How America's Cartoonists Skewer Politicians, from King George III to George Dubya* (Rowman & Littlefield Publishers, 2006). p. 172, n. 2.)。

- (2) ナストのキャリアに関しては次の文献を参照した。Albert B. Paine, *Thomas Nast: His Period and His Pictures* (Chelsea House, 1904: 1980); Morton Keller, *The Art and Politics of Thomas Nast* (Oxford University Press, 1968); *Thomas Nast: Cartoons and Illustrations* (Dover Publications, 1973); Fiona Deans Halloran, *Thomas Nast: The Father of Modern Political Cartoons* (The University of North Carolina Press, 2012).
- (3) 「ボス」 ツィードことウィリアム・M・トゥイード (William M. Tweed, 1823-1878) はニューヨーク州上院議員でありながらタマニー・ホールのボスとして悪名を轟かせた政治家である。タマニー・ホールは、市政を背後から操縦する民主党のマシーン＝地方の政党組織を指す。1860年代以降、大量の移民の到来に伴いタマニーのボスたちが職を世話し、移民票を買収操作することで、市政を支配するようになった。「リング」とはトゥイードの腹心の4人衆を指す。ナストは彼らを批判する諷刺画を『ハーパーズ・ウィークリー』に執拗に描き続けた。最終的にトゥイードは1871年に起訴され、73年に有罪判決を受けた。ナストとトゥイードの闘いについては、上記(2)の文献の他に、John Adler with Draper Hill, *Doomed by Cartoon: How Cartoonist Thomas Nast and The New-York Times Brought down Boss Tweed and His Ring of Thieves* (Morgan James Publishing, 2008) が詳しい。また、Roger A. Fischer, *Them Damned Pictures: Explorations in American Political Cartoon Art* (Archon Books, 1996) の Chap.1 を参照のこと。
- (4) 黒人に限らず中国人やインディアンなどのマイノリティに共感を寄せたナストだが、アイルランド系移民に対しては敵視する立場を崩さなかった。貴堂嘉之『アメリカ合衆国と中国人移民：歴史のなかの「移民国家」アメリカ』(名古屋大学出版会、2012年)の第4章は、再建期の『ハーパーズ・ウィークリー』に掲載されたナストの諷刺画を資料として中国人移民の表象を分析しているが、一部に黒人表象にも言及しており示唆に富む。
- (5) たとえば、カーリアー&アイヴズが1870年代中期から1890年代初期頃まで出版した、トマス・ワース (Thomas Worth, 1834-1917) による《ダークタウン》シリーズは、ステレオタイプ化した黒人たちが文明人の真似をするしぐさを滑稽に描いている。Bryan F. Beau, *Currier & Ives: America Imagined* (Smithsonian Institution Press, 2001), pp. 231-38.
- (6) 再建期における黒人史については、次の文献を参照した。ジョン・ホープ・フランクリン (井出義光他訳) 『アメリカ黒人の歴史：奴隷から自由へ』(研究社、1978)；本田創造『アメリカ黒人の歴史』(岩波新書、1991)；ベンジャミン・クォールズ (明石紀雄他訳) 『アメリカ黒人の歴史』(明石書店、1994)；上杉忍『アメリカ黒人の歴史：奴隷貿易からオバマ大統領まで』(中公新書、2013)。
- (7) ナストは南部の人種差別主義者の組織にも怒りを隠さなかった。彼は白人優越主義者の KKK や白人同盟などの暴力組織を繰り返し諷刺画にした。たとえば、《白く塗られた墓》(The Whited Sepulchre, 1872年9月7日号) は聖書の言葉に重ねて彼らの外面と内面の矛盾を鋭く突いている。
- (8) アイルランド人を猿顔の人物としてステレオタイプ化することは、イギリスのヴィク

トリア朝期の諷刺画にも見られ、それがアメリカに伝播したようである。反アイルランド人の感情と結びついた猿顔の表象については、L. Perry Curtis, Jr., *Apes and Angels: The Irishman in Victorian Caricature*, revised ed. (Smithsonian Institution Press, 1997) に詳しい。

(9) ウィリアム・シェイクスピア (小田島雄志訳) 『オセロー』(白水社、1983)、73 頁。